



© Wael Shawky; Courtesy the Artist and Lisson Gallery

監督:ワエル・シャウキー

〈東京上映〉
字幕翻訳:市原水緒、大竹恵子、中尾優子 (日本映像翻訳アカデミー)

宣伝美術:阿部太一 (GOKIGEN)
制作:砂川史織
インターン:寺田 凜、宮岡夏希、山本菜葉

プログラム・コーディネート:横堀広彦

特別協力:株式会社ヒューマックスシネマ
協力:リゾンギャラリー
主催:フェスティバルトーキョー

HUMAX CINEMA

Directed by Wael Shawky

〈Tokyo Production〉
Surtitles: Mio Ichihara, Keiko Otake, Yuko Nakao (Japan Visualmedia Transtation Academy)

Publicity Design: Taichi Abe (GOKIGEN)
Production Coordinator: Shiori Sunagawa
Interns: Rin Terada, Natsuki Miyaoka, Ayana Yamamoto

Program Coordinator: Masahiko Yokobori

Special cooperation from HUMAX CINEMA INC.
In cooperation with Lisson Gallery
Presented by Festival/Tokyo

フェスティバルトーキョー実行委員会 顧問	野村 萬	公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会 会長
名譽実行委員長	福原義春	株式会社資生堂 名誉会長
実行委員長	高野たけ	豊島区長
副実行委員長	福越宏雄	公益財団法人新国立劇場運営財団 顧問
	市村作知雄	NPQ法人アートネットワーク・ジャパン 顧問
		フェスティバルトーキョー ディレクター
	小澤弘一	豊島区文化商工部長
	東澤 昭	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
	尾崎元規	公益社団法人企業メセナ協議会 理事長 花王株式会社 顧問
	新倉純子	東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授
	田中俊宏	株式会社資生堂企業文化部長
	鈴木敦子	アサヒグループホールディングス株式会社CSR部門 ジェネラルマネージャー
	鈴木正美	東京商工会議所豊島支部 会長
	永井多恵子	公益財団法人せたがや文化財団 理事長
	横口友久	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	岸 正人	公益財団法人としま未来文化財団 劇場開設準備担当課長
	蓮池奈緒子	公益財団法人としま未来文化財団
		あうるすぽっと (豊島区立舞台芸術交流センター) 支配人
	米原晶子	NPQ法人アートネットワーク・ジャパン 理事
	澤原円花	フェスティバルトーキョー 事務局長
	河合千佳	フェスティバルトーキョー 副ディレクター
	佐々木美津子	豊島区総務部総務課長

監事 法務アドバイザー 横井健策、北澤尚登 (奇童通り法律事務所)

フェスティバルトーキョー実行委員会事務局

ディレクター 市村作知雄

副ディレクター 河合千佳

事務局長 澤原円花

制作 十方重紀子、近川真由子、砂川史織、松宮俊文、三平文乃、横井貴子、武田佑子、岡崎佳実子、藤井友理、細川浩伸、長田崇史、西宮春香、山縣昌雄、横尾千穂

広報 小倉明紀子、神永真美

経理 堤 久美子

総務 米原晶子、平田幸美

票券 武井和美

技術監督 廣川英司

技術監督アシスタント 河野千鶴

照明コーディネーター 水下山田 (株式会社ファクター)

音響コーディネーター 相川 益 (有明会社サウンドウィーズ)

アートディレクション 氏家啓雄 (有明会社氏家プランニングオフィス)

イラスト naomi@paris.tokyo

ウェブサイト 竹下雅哉 (有明会社氏家プランニングオフィス)

ブックレット 降旗 剛 (FLAGS)

当日パンフレット 小林 剛 (UNA)

海外広報・翻訳 ウィリアム・アンドリュース

物販 遠江 淳

演目紹介執筆 鈴木理映子

プログラム・コーディネーター 横堀広彦

中国プログラム・コーディネーター 小山ひとみ

ウェブマガジン編集 島貫泰介

インターン

石川 優、井上 凜、岩井美菜子、薄井理美、梅村真由、宗 卓然、方瀬りっか、北村沙里、工藤 伶、栗山なつみ、クシナレ 実、土間崇崇、呉 芳瑠、小林礼乃、小林春菜、薄みずき、鶴田真菜、寺田 凜、西 実津子、西本彩乃、野口明日香、堀登幹子、野本ひとみ、橋本 実、林美沙希、堀越等乃、宮岡夏希、村上瑠美、山本菜葉、山本菜穂、横見咲季

スペシャルサンクス FITサポーターのみなさま

主催 フェスティバルトーキョー実行委員会

豊島区 / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPQ法人アートネットワーク・ジャパン、

アーツカウンシル東京・東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

オープニングプログラム共催 国際交流基金アジアセンター

協賛 アサヒグループホールディングス株式会社、株式会社資生堂

後援 外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM

特別協力 西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、

株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社、株式会社ヒューマックスシネマ

東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区可連連合会、

一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、

公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、

特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、池袋西口公園活用協議会、

南池袋公園をよくする会、セレクトメトロポリタン、

ホテル グランドシティ、池袋ホテルニュー

宣伝協力 株式会社ポスターハリス・カンパニー、

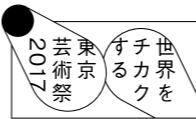
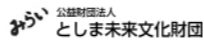
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、アップリンク

平成29年度 文化庁 文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業

(池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業、としま国際アートフェスティバル事業)



フェスティバル



tokyo-festival.jp

編集・発行:フェスティバルトーキョー実行委員会事務局 〒171-0031 東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F TEL：03-5961-5202 http://www.festival-tokyo.jp

Festival/Tokyo Executive Committee

Advisors:

Man Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor)

Yoshiharu Fukuhara (Honorary Chair, Shiseido Co., Ltd.)

Honorary President of the Executive Committee:

Yukio Takano (Mayor of Toshiima City)

Chair of the Executive Committee:

Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation, Senior Alumnus, Asahi Brewers, Ltd.)

Vice Chairs of the Executive Committee:

Sachio Ichimura (Advisor, NPO Arts Network Japan; Director, Festival/Tokyo)

Kaichi Ozawa (Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshiima City)

Akira Tozawa (Secretariat Director, Toshiima Future Culture Foundation)

Committee Members:

Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation)

Sumiko Kumakura (Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts)

Toshihiro Tanaka (General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.)

Atsuko Suzuki (General Manager, Corporate Social Responsibility Section, Asahi Group Holdings, Ltd.)

Masami Suzuki (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshiima)

Taeko Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation)

Tomohisa Higuchi (Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshiima City)

Masato Kishi (Manager, New Theater Opening Preparation Room, Toshiima Mirai Culture Foundation)

Naoko Hasuike (Toshiima Mirai Culture Foundation; Executive Director, Owispot Theater)

Akiko Yonehara (Representative, NPO Arts Network Japan)

Madoka Aoshihara (Administrative Director, Festival/Tokyo)

Chika Kawai (Vice Director, Festival/Tokyo)

Supervisor:

Mitsuko Sasaki (Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshiima City)

Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Ketto Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat

Director:

Chika Kawai

Administrative Director: Madoka Ashihara

Production Coordinators: Akiko Juman, Mayuko Arakawa, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Ayano Misan, Takako Yokoi, Yoko Takeda, Yumiko Okazaki, Yumi Fujii, Hironobu Hosokawa, Takashi Osada, Shogo Shinomiya, Masao Yamagata, Chihō Yokoo

Public Relations: Akiko Ogura, Mami Kaminaga

Accounting: Kumiko Tsutsumi

Administrator: Akiko Yonehara, Saki Hirata

Ticket Administration: Kazumi Takei

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kouno

Lighting Coordination: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)

Sound Coordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction: Yoshio Ujiiie (Ujiiie planning office)

Illustrations: naomi@paris.tokyo

Website: Masaya Takeshita (Ujiiie planning office)

Booklet Design: Takeshi Furihata (FLAGS)

Program Design: Takeshi Kobayashi (UNA)

Overseas Public Relations, Translation: William Andrews

Merchandise: Jun Watanabe

Japanese Writing (Production Pages): Rieko Suzuki

Program Coordinator: Masahiko Yokobori

Chinese Program Coordinator: Hitomi Oyama

Online Magazine Editor: Taisuke Shimamuki

Interns:

Yu Ishikawa, Nagisa Inoue, Minako Iwai, Satomi Usui, Mayu Umemura, Rong Zhuoran, Rikka Katase, Shiori Kitamura,

Rei Kudo, Natsumi Kuriyama, Sara Gunnare, Mana Kamioka, Hoen Go, Ayano Kobayashi, Haruna Kobayashi, Mizuki Sawa,

Mana Tsuruta, Rin Terada, Natsuko Nishi, Ayano Nishimoto, Asuka Noguchi, Tamako Noto, Hitomi Nomoto, Aoi Hashimoto,

Misaki Hayashi, Kotono Horikoshi, Natsuki Miyajima, Emi Murakami, Ayano Yamamoto, Mai Yamamoto, Saki Yokomi

Special thanks to the FIT Volunteer Supporters

Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee,

Toshiima City, Toshiima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ), Arts Council Tokyo & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

Opening production co-organized by the Japan Foundation Asia Center

Sponsored by Asahi Group Holdings, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO, J-WAVE 81.3 FM

Special cooperation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd., HUMAX CINEMA INC.

In cooperation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshiima, Toshiima City Shopping Street Federation, Toshiima City Federation, Toshiima City Tourism Association, Toshiima Industry Association, Toshiima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Ikebukuro West Gate Park Management, Neighborhood of the Minami Ikebukuro Park, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association

PR Support: Poster Hari's Company, Waseda University Tsuibouchi Memorial Theatre Museum, UPLINK

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2017

Period: September 30th (Sat) to November 12th (Sun) , 2017

十字軍芝居 — 三部作 —

監督:ワエル・シャウキー

“Cabaret Crusades”

Directed by Wael Shawky

2017.
10.14 Sat - 10.16 Mon

池袋HUMAXシネマズ

Ikebukuro HUMAX Cinemas

第一部『ホラー・ショー・ファイル』(2010年、30分)

Part 1 “The Horror Show Files” (2010. 30 min.)

第二部『カイロへの道』(2012年、60分)

Part 2 “The Path to Cairo” (2012. 60 min.)

第三部『聖地カルバラの秘密』(2015年、120分)

Part 3 “The Secrets of Karbalaa” (2015. 120 min.)

FT Festival//Tokyo



Tokyo Festival 2017

十字軍をアラビア語とヴェネツィアン・グラスで語る

～歴史を語り合う新たな芸術がやってきた～

越村 勲（東京造形大学教授）

越村 勲（東京造形大学教授）

越村 勲（東京造形大学教授）

幼いスルタンが足をバタバタさせる。第一部は、そんな可愛い場面にほっとしたりするものの、基本は戦争と殺戮の連続、まさに『ホラー・ショー・ファイル』（2010）。ただ、その争いは単純な「聖戦」ではない。

三部作の物語は、大枠としてA・マアルーフの『アラブが見た十字軍』を基にしている。この歴史物語は、アラブの視点に加え、そのアラブがヨーロッパから「遅れた」のは何故かを自問したところに特徴がある。エジプト人映像作家ワエル・シャウキーは、いくつかの時代と都市それぞれを舞台に、その物語を描いていく。

あらずじはこう。最初の十字軍は1096年。それが1099年には、エルサレムを占領する。エルサレムへ行く途中、フランクつまりヨーロッパ人はアラブ内部の分裂を利用し、町々ですべての男、女や子供を虐殺する。ある町の軍勢が、数週間彼らに抵抗する。一旦、すべての命を助けるようお互いが合意。だが十字軍は町に入ると、すべてのイスラム人家族を殺害しながら、飢えのため「人食い」をする。あまりの恐怖から多くのアラブ人は、十字軍を自由に通過させる。フランクはエルサレムの市壁で抵抗に遭うが、それも打ち破った。

第二部『カイロへの道』（2012）は、第一次十字軍の余波を受け、中東の中が複雑な関係になっていく様子を写す。十字軍がエルサレムを占領した後、どのようにダマスカス、アレppoそしてバグダッドに進行したかを描く。また映画はアラブのリーダー内部の関係についても描いていく。軍隊の統制が取れず、彼らも非情な残虐行為を犯した。そのため、彼らは長い間劣勢を覆すことができなかったのだ。

この部分は時々理解不可能である。あまり知られてい

ない人物、都市、出来事が次々と出てくる。しかし、すべての物事が分からなくても、この一時間の作品は、貪欲、憤慨、裏切りと流血の不思議な世界に観る者を引き込んでいく。殺し合いを続ける王たち、互いに殺人を企てる兄弟たち、色んな国王と次々に結婚する花嫁たち―これは都市を象徴している―の話で、『カイロへの道』は満ち溢れる。十字軍は邪魔するものはすべて破壊する。しかしシャウキーは、アラブを犠牲者としてではなく自らの運命に対して責任がある存在として表現する。

第三部『聖地カルバラーの秘密』（2015）でシャウキーは、中東が陥った複雑な状況の原因を冷静に視ていく。そのため第三部は、680年のカルバラーの闘争の回想から始まる。この闘争はスンニー派とシーア派の、イスラム教同士の分裂の始まりを意味するのだ。それはイスラム教とキリスト教の「聖戦」の内側に「別の対立」があったことを意味する。それから映画は、サラディン率いるイスラム教徒が1187年、十字軍を追い出してエルサレムを掌握する様子を映し出す。サラディンは戦略に長け、流血を嫌った。彼の聖都奪還のための懐柔策は功を奏した。彼は虐殺の代わりにヨーロッパ人に身代金を払わせ、身代金を都合できなかった者も支払いを免除。未亡人と孤児には、帰還ための土産を与えた。キリスト教の寺院を尊重し、キリスト教徒の聖地巡礼を許した。ただ、そのサラディンの権勢にも陰りがやってくる。

最後にシャウキーは、エルサレム奪還を目指した第四次十字軍の無意味さを示し、イタリアの勝利とルネサンスの到来を予告する。こうして映画は終わる。以上の物語を演じる声優たちのせりふ回し、歌や音楽はオリジナルティーに溢れ、実に素晴らしい。



© Wael Shawky; Courtesy the Artist and Lisson Gallery

越村 勲（東京造形大学教授）

シャウキーは、フランクつまりヨーロッパ人にも古アラビア語を話させる。当初シャウキーは、『十字軍芝居』を世界的に広めるため、英語で作るべきだと考えた。しかし彼は「あとになって私はこの考えが確実に間違っていると気づいた。アラビアの歴史を元にしているのだから、全て古典的なアラビア語で語られるべきだ。」と語っている。なるほど、皇帝や教皇といったキャラクターも古アラビア語を話すことによって、両者の境界を曖昧にすることができるのではないか。また彼は、ヴェネツィアン・グラスを人形に使った。これもイスラム・キリスト教世界の境界を曖昧にすることになる。そもそもヴェネツィアは、物語のなかで重要な役割を果たしている。『聖地カルバラーの秘密』は、1204年にヴェネツィアがコンスタンティノープルを占領したところで話の終わりを迎える。ヴェネツィアは残酷さの源である。そして美の象徴でもある。

ヴェネツィアン・グラス、そして木や陶器のマリオネットがこの映画の主役。年を追うごとに人形の姿は、シャウキーがニューヨークのメトロポリタン美術館で学んだアフリカの仮面に似て、自然的で動物的になっていく。戦争が続くにつれ、十字軍とアラブ兵たちはだんだんと脆く、透けはじめ、人間らしさが失われるのだ。

そもそも人形劇は、シャウキーの故郷エジプトでも盛んであるようだ。

シャウキーは、1971年にアレクサンドリアに生まれた。メッカで幼児期を過ごした彼の作品には、イスラムの美意識が見てとれる。1994年にアレクサンドリアの芸術学校を卒業した後、美術学修士を取るためフィラデルフィアへ移った。2011年にエルnst・シェリング財団のアートアワードを受賞して、最も独創的なビデオ・アーティ

ストに仲間入り。初期の作品『ケーブル』（2005）では、ドイツのスーパーマーケットを、コーランを復唱しながら歩く自分自身を撮影した。人前でアラビア語を話すことが、好奇的になった頃だ。その後シャウキーは、操り人形を選んだ。その理由として、人形の方が役者よりも、可愛いく繊細だからだと彼は語っている。「観客は操り人形に自己を見出すことができるし、投影することもできる。これがプロの役者ならば、たとえアル・パチーノが演じたとしても、そうはいかない。誰かが演じているものとして見てしまうから。」

今日の世界は最早特定の力で抑えられない。このことは、逆説的に、歴史の中で個人が果たす役割を大きく見せる。階級や国家という、これまで世界を担ってきた集合が力を失うからだ。そして個人の一部は、運命を自らの手で握ろうとする。人形使いになろうとする。まるでファウストのように。

『十字軍芝居』では、人形を動かすワイヤーがはっきり見える。歴史が作られ、人々が操作されていることを思い出させるものとして、ワイヤーは可視化されている。一つの人形が複数の役をやることもある。すべての人形が9本のひもで操られる。目、肩、手、脚に二本ずつ、そして骨盤に一本である。主役級にはさらに目に二本、口に二本ひもがつく。

三部作にはそれぞれ独自の視覚的特徴がある。『ホラー・ショー・ファイル』における濁った色は、物語が始まる中世のヨーロッパを表現している。『カイロへの道』は、特に16世紀のボスニア人地図製作者マトラクチュ・ナスーフの鮮やかな色のアラビア細密画からヒントを得ている。『聖地カルバラーの秘密』のピンクの塔



© Wael Shawky; Courtesy the Artist and Lisson Gallery

越村 勲（東京造形大学教授）

は、インスタレーションとしてリヴォリ城に本格的に再現されたものだが、イタリア・パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂にあるマトラクチュとジョットが描いたフレスコ画にインスパイアされたものだ。

最後に歴史と芸術の問題!

監督のスタッフへの指示は、「十字軍にたいするアラブなりの見方と一致するような、グラフィックや立体のかたちを見つけてくれ」だった。そしてシャウキーは、映画の側が十字軍を「リードする」ことを求めながら、一歩ずつ映像を作っていった。他者の目を意識し、彼自身の歴史観を確かめながら、芸術を形にしていく。要するに、シャウキーの視覚芸術は「手作り（マニュアル）」の側にある。こういう姿勢には、歴史は事実の蓄積よりもむしろ人間の創造の結果であってほしいという感覚があるはずだが、ドイツのアーティストならば、さらに「社会的彫刻」ということばを使うだろう。「生きている者はすべてが社会という生き物の創作者であり、彫刻家または建設者になる」とか言うだろう。しかし、「歴史上も現代も意思決定（特に政治や経済の）



© Wael Shawky; Courtesy the Artist and Lisson Gallery

越村 勲（東京造形大学教授）

はだれかによって作られたり、操られたりしている」という人はもっと多い。

そしてシャウキーは言う。「芸術は学び、発見するための手段でもある」と。シャウキーの人形のワイヤーはどこか一局につながっているわけではない。そこがあたらしい。

ま、いろいろという前にまずは『十字軍芝居』の世界に迷い込んでみて!

そういう私は、三部の最後でヴェネツィアに襲われるクロアチアを研究している。

越村 勲

東京造形大学教授。富山県生まれ、ザグレブ大学・一橋大学大学院修了（社会学博士）。専攻はクロアチアなど境界地域の社会や文化の歴史。大学では世界のアニメーションについても共同講義。広島アニメーションフェスティバルでは第11回大会より同ディレィブルティン編集長。またクロアチアの歴史に関するアニメーションをプロデュースしている。